

日曜日は雨だった。私は一日家にいようと思った。そして、趣味の絵を描こうと思いスケッチブックを取り出す。

何を描こうか。

雨の絵を描こう。鳥居のある森に、雨がしとしとと降っている絵。幻想的な景色がぱっと浮かんだ。

すると、弟が近くにやってきて、「一緒に描く」と言ってきた。私の横に座る。二人でゆっくり話すなんて久しぶり。

チリン…、チリン…

音がした。その後に、「…おねえちゃん…」という弟の声。いつの間にか寝ていたらしい。

「どうしたの？」と答えながら体を起こす。

目を開けると、そこには鳥居と森が広がっていた。見覚えのある気がする…。けど、家の周りにはこんな場所はなかったはず…。

そんなことを考えていると、弟が「おねえちゃん、ここ、おねえちゃんが描いていた絵に似ているね」と弟が言った。

そう言われてみると、そんな気がしてくる。なんで私が描いた絵がここに？

チリン…

目が覚める前にも聞いた鈴の音が。音のした方を見ると、そこには赤い水引を首に巻いた白い狐がいた。

そして私たちの前に来て、「ついてこい」とでも言うかのように、鳥居の向こうへ歩いていった。

私たちは、このどこかも分からない場所で見つけた一つの希望がある白い狐の背を追って、鳥居をくぐりぬけた。

鳥居をくぐりぬけた後、いつの間にか自分の部屋に戻ってきた。時計を見ると、絵を描き終えたときと同じ時間を指していた。

弟と顔を合わせ、「いい景色だったね」「白い狐さんかわいかった」などと不思議な体験について話した。久しぶりに弟とゆっくりと話せた。

夜になって、ふと昼間に描いた絵を見た。

すると、自分で描いていないものが描かれていた。

昼間、弟と見た白い狐だ。絵から、

チリン

と音が聞こえるような気がした。